

練馬区立石神井公園ふるさと文化館 常設展示 内山大介

はじめに

平成 22 年 3 月 25 日、東京都練馬区にある石神井公園内に新しい博物館「練馬区立石神井公園ふるさと文化館」（以下、当館）が開館した。それまで練馬区には、昭和 45 年に石神井図書館地階に設置された郷土資料室が区立の博物館施設として存在していたが、「狭隘であったため、収蔵資料増加への対応や展示の充実など」の課題があった。それらの問題を解決すべく、平成 16 年から整備計画に着手し、約 5 年をかけて開館に到ったという（小金井 2010）。

ここ数年、例えば東京都内においては目黒区・足立区・北区など、常設展示を全面あるいは一部リニューアルする博物館の事例が増えてきている。しかし当館のように建物全てを新築してオープンする例は決して多くはないし、また石神井公園という都会の観光スポットでもある場所に新規開館した当館は、一般にも、また博物館界にも今後多くの反響があるだろう。そしてそれは、単に建物や設備が新しいということにとどまらない。博物館としては、その展示内容や手法にも新しい傾向や技術が取り入れられているし、また地域の博物館としての独自性を発揮するための努力が随所にちりばめられている。そこで本稿では、近年の博物館の動きを念頭に置きながら、当館の常設展示の意義を論じてみたい。

（1）展示施設の概要

ふるさと文化館と付属施設 当施設はギャラリーや会議室などの施設貸し出しも行い、また隣接する池淵史跡公園内に区指定文化財・内田家住宅などの



ふるさと文化館外観



わがまち練馬情報コーナー1

屋外施設がある。また石神井プールなども併設されており、多目的な利用を考えた施設設計となっている。施設運営計画にも掲げられているように、生涯学習や観光レクリエーションをはじめとする様々な利用者のニーズに応えることを目的にした施設といえ、博物館自体もそういった側面が強いと思われる。

展示施設の概要 当館の展示施設は1階と2階に分かれる。1階には「わがまち練馬情報コーナー1」というスペースが設けられ、館周辺でみられる鳥、虫、植物や名所、散歩コース、伝統工芸などを紹介して

いる。来館者が掲示板に情報を書き込んだり、工作をしたりすることのできる体験コーナーとして、大人から子どもまで楽しめるスペースである。また2階がいわゆる常設展示、企画展示のスペースであり、さらに図書閲覧や情報検索のできる交流ライブラリーや練馬情報コーナー2があり、全体を通して利用者が積極的に参加・体験をしたり、情報発信をすることのできる館としての性格が伝わってくる。



常設展示室の様子

(2) 「近郊」と「都市化」

展示のストーリー 常設展示のストーリーは、プロローグ、江戸以前の練馬、近郊農村文化、近郊の村からまちへ、近郊のまち文化、体験コーナー、エピソードの7コーナーから構成されている。基本的には原始古代から現代までを視野に入れた通史的展示であるが、その中に民俗資料などを取り入れながら強いテーマ性を持たせている。特に近代以降が展示の4分の3以上を占め、現代の我々の生活に近い時代に焦点を当てた内容である。そして、上記の展示コーナー名をみれば明らかなように、ストーリーの軸となるのが「近郊」というテーマであろう。具体的には、農村から都市部へと変貌をとげた地域の姿が描かれているのであり、練馬の近現代史における大きな生活変化をそこに見出している。

練馬大根からサラリーマンまで その近郊としての練馬を印象づける最も大きな要素が、練馬大根である。展示室入り口すぐにみえる巨大なたくあん漬けの大樽はその象徴ともいえる。江戸・東京の食を支えた食材としての大根は、江戸時代以来練馬から都市部へ出荷され、肥料としての下肥が逆に都市部から練馬へもたらされた。その循環が都市と近郊との関係性の象徴であり、それを支えた農家や農村に関わる史資料がそれを裏付ける。さらに大根のたくあん漬けの生産や、種子屋の活動により名産品として



昭和30年代の「体験コーナー」

全国や海外にまで広がる練馬大根が紹介される。それは近郊地域から全国へ発信される練馬の姿であり、練馬が誇る地域文化のひとつであることが伝わってくる。

また近郊としての練馬を位置づけるもうひとつのテーマが都市化による人の往来である。近代以降、鉄道路線の充実や道路の整備が進められて地域の住宅地化が促され、また行楽地としての一面ももつようになる。それは、練馬からサラリーマンとして都心へ通う人々、都心から観光客として練馬へ来る人々を表現した内容であり、ここでも都市近郊としての練馬の歴史が強く意識されているといふ。人や物資が練馬と都心とを行き来し、そこに近郊地域としての練馬の姿が形成されていったのである。これらの展示内容は、背景にあるテーマを明確に示すものであり、来館者にも非常に分かりやすい構成となっている。

都市と近郊 評者は以前にも都市と近郊という博物館展示のテーマがもつ意義と課題を論じたことがあるが（内山 2009）、同様の指摘が当館にも当てはまるものと考えられる。地域間の関係性を問う展示は、従来の博物館展示の中で示されることはあまりなかった。それは近年みられるようになった新しい展示の取り組みであり、また多様な関係性の中に地域を位置づけることのできる相対的な地域観を根底に含む点で、意義深いものである。しかし一方で、近郊というテーマであればなおさら浮き彫りにされる、都市から地域に負わされた様々な歴史的役割をどう表現していくのかが課題となろう。特に、都市化による公害問題、住宅地化による新・旧住民などの地域内の軋轢、いわゆる迷惑施設への対応など、近郊ならではの望ましくない歴史的問題があるはずであり、またそれは現在にもつながる地域課題であるし、また成増飛行場を抱えた練馬の戦時中の役割や歴史が展示に明示されない点も気になるところである。近郊というテーマからみえるはずの地域観の多様性への追求を今後期待したい。

（3）体験コーナーとしての昭和 30 年代

展示の概要 また、博物館展示として近年話題となっている昭和 30 年代の展示が当館にも作られている。昭和 30 年代を中心とした暮らしを表現した「戦後生活再現展示」が、平成 3（1991）年の葛飾区郷土と天文の博物館を皮切りに、17 の博物館で行われているといわれるが（青木 2007）、最近でも足立区立郷土博物館や国立歴史民俗博物館などに同様の展示がみられるようになり、全国で 20 例前後になるものと思われる。その中で、当館の特徴をあげるならば、ひとつは名称にも冠された「体験コーナー」としての位置づけである。当コーナーは「昭和 30 年代後半の駅前風景と昭和 40 年代の民家を再現」

（石神井公園ふるさと文化館 2010）したもので、西部電車・石神井公園駅の巨大写真パネルの両側にその町並みをファサードのみ再現し、暖色系のライティングによって夕暮れの情景を演出している。さらにその奥には民家の台所や居間などが生活用具とともに再現され、来館者は中に入って観覧することができる。加えて当コーナーはその中央にコマや輪投げなどの昔遊びができるようになっており、全体として体験・体感を前面に出したコーナーであるといえる。

昭和 30 年代展示の特徴 一般に、戦後を表す展示として高度成長期を選択する博物館が増えているが、その多くが原寸大の復元模型を配し、そのリアルさを追求するためにキャプション等を最小限にとどめるという事例が多い。そのため、来館者にとっては一見するとそれが展示ストーリーにおいてどのような位置づけで示されているのかがわかりにくい場合も多くみられる。またそれらはストーリー上の位置づけよりも、昔の暮らしや情景を体験・体感することに重点が置かれている場合もある。例えば福井県立歴史博物館では通史展示としての「歴史ゾーン」とは別に、「トピックゾーン」として昭和 30 年代の模型や資料を展示しており、通史上の意味とは異なった展示意図がそこにはみられる。このような事例は当館における展示と同様の性格をもつものであろう。しかし当館では、別コーナーで都市化と住宅地化を表現しているだけに、当コーナーでも高度成長期に発達した新しいまちとしての鉄道沿線の地域や人々の生活を具体的に表現することができたはずである。それだけに、細かな設定や説明がなかったのは残念であった。

（4）展示手法と体験・体感

一次資料と二次資料 当館のようなテーマ性の強

い展示には、資料相互の関係性や流れを示す必要があり、展示パネルによる文字での説明や模型類が多用されることが多い。裏を返せば、それは一次資料それ自体の価値が薄れてしまうことでもある。しかし当館では実物資料が多く配され、また考古・民俗資料を中心に露出展示を多く取り入れることにより、資料自体のもつ意味を示す努力が垣間見える。さらに最も注意が払われているのが、ハンズオンを展示に組み込むということだろう。一次資料・二次資料を含めて、さわる、のぞく、動かすといったアクションを来館者に求める展示が各コーナーに配されており、展示設計において強く意識された要素であることが分かる。

展示替えへの配慮 また、入れ替えの容易な展示ケースや、壁面に配されたラインによってパネルや資料の高さが自在に変えられるラインシステムをみれば明らかなように、自由な展示替えを念頭に置いた作りであることが分かる。また全体として小コーナーを細かく配置した設計も今後の多様な運用を見据えているように見受けられる。常設展示は作ってしまえば終わりではなく、最近では常に新しい情報をもとに成長する展示であることが求められているが、当館でもそういった配慮が各所にみられた。常設展示に対する考え方は、このような側面にも表れているといえよう。

おわりに

以上、練馬区立石神井公園ふるさと文化館における常設展示について、特に重要な要素といえる近郊というテーマと、体験・体感的要素、さらにその展示手法について個々に論じてきた。地域博物館を語るときに、参加・体験・体感はもはやはずせない要素となった。それは当初、講座やワークショップなどの

教育普及事業として推進される側面をもっていたが、展示そのものに体験的要素を取り入れる博物館が増え、それらが常設のものとして広がってきている。当館ではそれが徹底された形で示されているといえよう。さらに参加・体験を広義で考えるならば、展示叙述そのものにも当てはまる。当館の常設展示は特に古くからの地域住民にとっては非常に馴染みの深いテーマや時代設定で行われており、見る側にとっては自らの経験や知識を呼び起こす契機として観覧することができる。自らの記憶と練馬の歴史とを結びつける媒介として展示が機能するともいえるだろう。それはいわば、来館者の意識の上での参加・体験を促しているものである。さらに、地域の情報を来館者自身が書き込める1階の掲示板などからは、展示を通じた来館者からの情報収集も想定していると考えられる。それが展示へとフィードバックされ、展示替えによって成長する展示としていくことが、今後の可能性でもあり課題でもあるだろう。近年の博物館に求められる様々な課題が、当館の展示には具体的に示されているのである。博物館における参加・体験・体感の新しい形を今後も期待したい。

参考文献

- 青木俊也 2007年「戦後生活再現展示の思考」『武蔵大学人文学会雑誌』39-1
- 内山大介 2009年「博物館展示と地域像相対化の可能性—足立区立郷土博物館における新常設展示の検討から—」『博物館学雑誌』35-1、全日本博物館学会
- 小金井靖 2010年「区民とともに歩む新しい地域博物館」『石神井公園ふるさと文化館ニュース』創刊号
- 石神井公園ふるさと文化館 2010年『常設展示ガイド』
- 練馬区 2007年『(仮称)「ふるさと文化館」展示基本計画説明書—概要版』
- 練馬区 2007年『(仮称)「ふるさと文化館」施設運営計画説明書—概要版』

【歴史民俗資料科学研究科博士後期課程・
足立区立郷土博物館 専門員】